

俺は小説の中で生きて  
いたことを知ってし  
まった。

狐ノ夜

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

殺人容疑をかけられていた里見 連太郎は悠河の死戦をよつてようやく地獄から解放された。

そしてある時、里見 連太郎は疲れたのか、すぐに眠った…

だが目覚めたその先は…

連太郎が3次元いたらという馬鹿作者の妄想を書いたものです。下手なのは見逃して下さい。

# 目次

プログラグ

1



# プロローグ

.....

「俺は『東京エリアの救世主』だぞ。信用出来ないのか？」

.....

「ありがとう連太郎。私の孤独を埋めてくれて。私に生きる意味を教えてください」

.....

「ありがとう火垂。俺を信じてくれて。俺と一緒にたたかってくれて」

.....

「さあ、今度は決着をつけるぞ。巳継悠河」

.....

『ターミナル・ホライズン  
二千分の一秒の向こう』

.....

『君の眼にはリミッター回路が搭載されていて、ある一定の回転数まで行かないようになっっている』

.....

「馬鹿な……」

「こんな流れで出会っていないければ、友達になれたかもしれないな」

「これは戦争、です……よ。僕たちと、君たちの。ガストレア戦争は、ま、まだ……  
終わってなど……」

「延珠！ ティナ！」

「お馬鹿」

「もう、全部終わったのか？」

「みんな道を空ける。東京エリアの救世主が通られるぞ」

「……面白い展開だな……」

2018年???:

「んあ…」

連太郎はよく寝たのか目が覚め、寝惚けながら延珠の方を向く。

「… 延珠は？」

延珠がいた場所が布団ごとなくなっていた…

「延珠？おい、延珠いるか？」

大声で呼んでも家に響くだけで返事は返ってこない。

\*

それから部屋の中にいるかもしれないと、探したがいない。

「どうなってるんだ！クソっ！」

突然居なくなった延珠を探すため外に飛び出したが…

「ど、何処だよ！！！」

全然知らない場所だった…

色んな場所にビルが並び、人も多く賑わってる。

そしてモノリスらしき壁も見えない。この賑わい、発展している状況でとてもガストレアに支配されていた場所と思えない。

「どうなってるんだよ!?!」

里見 連太郎は叫び、走りながら、ここが東京エリアなのかをパニックになりながら証拠になるもの探ってたが、全然見つからない。

「そ、そうだ人に聞けばいいのか!!?」

連太郎はそう考え、すぐに近くの男性に聞いた。

「あの、すみません、聞きたいことがあるんですが…」

「え? はい、なんででしょうか…」

「ここは東京エリアなんですか? モノリスも見つからなくて…」

「え? 東京エリア? モノリス? あー、小説の話だな! なんてそんなこと聞いているのかが分からないが俺がオタクで良かったな!」



「え？小説？」

そして、連太郎は小説の中で生きていたことを知ってしまった。